

高校生へ 私が選んだ1冊の本

「ジェンダーと脳」

ダフナ・ジョエル：著

紀伊國屋書店出版部

千葉県

千葉県立葉園台高等学校

浅野 恵舞

「ジェンダーレス」と謳われる現代社会。社会的性差別をなくそうという取組が、世界中で行われているのは事実であるし、私たちもよく知っている。だが、あらゆる生活の場面で、私たちはジェンダーに対する無意識な思い込みをしているのである。「何をもちて男らしい・女らしいといえるのか。」そんな問題意識を、この本が想起させてくれた。

この本では、人間の脳はみな「モザイク」である、ということを終始一貫して述べている。人間の脳のデータを収集し、脳のいくつかの部分で女性的か男性的かという指標でカラースケールを用いて示し、男性、女性のそれぞれを表にまとめるという実験を行った結果、どちらの表もカラフルなモザイク状になったのだ。全体的に見れば、男性の表は多くの面積を男性的である色が占め、女性の表は多くの面積を女性的である色が占めたが、表全体が1色で塗りつぶされることはなく、女性的である色を一部持つ男性もいれば、男性的である色を一部持つ女性もいた。むしろ、大多数の人が、男性的であることを示す色と女性的であることを示す色のどちらも併せ持ち、どちらか一方の色のみを示す人は非常に稀であった。この結果から筆者が述べたのは、脳の男らしさ・女らしさというのは、性別によって二極化されるのではなく、個人の個性として多様に受け入れられるべきだということだった。これまで、脳の大きさは女性より男性の方が大きいので、男性の脳の方が優れている、などと男女の脳は別物であると述べてきた科学者はたくさんいた。脳が女性より男性の方が平均して大きいというのは事実だが、あくまで「平均」であり、生殖器のような男女で決定的に違いが出る器官とは違い、男性より脳が大きい女性が存在するように、脳の性差は絶対的ではない。

脳の性質は性別に関わらず多種多様である、ということは、言われてみれば確かにそうだと私も感じた。現に、私の友人には、自分のことを「僕」と言う女性もいるし、私の弟は、私以上に髪型に気を使い、出かける前にヘアアイロンで髪を整える。では、なぜ社会

にはジェンダーという差が顕著に表れるのか。それは、男女は社会的に違うものだというバイアスを、社会の中で成長・生活していく過程で植え付けられているからである。子供の頃から、男の子はボール、女の子は人形などというおもちゃを与えられ、男と女では遊び方も趣向も違うと無意識に教わってきた私たち。そのような二極化された社会では、男も女も損害を被ることになる。この本では、その様々な例が述べられている。女性は男性より数学ができない、という固定観念のためにコンピュータサイエンスなどの分野では女性は働きづらい。有名なタイタニック号の沈没の話のように、男性は自分の身を挺して女性を助けるのが普通だ。このような例をあげれば、ジェンダーは私たちにとって弊害であることは目に見えてわかる。それなのに、それが社会の決まりだから仕方がないと言わんばかりに、私たちは受け入れている。このような考えを変えるためには、「脳はモザイク論」は最適だと思う。

「性別は身長、体重、年齢、眼の色などと同じく、身体的特徴を表す言葉の一つに過ぎない。」これは、この本の筆者が思い描く未来である。この未来像に非常に感動した私は、今からでもジェンダーに対する自分の意識を変えようと強く思った。「ジェンダーは、私たちがその中で生きている牢獄の一つである。」そんな「牢獄」から抜け出すために、私たちは、周りを怖がらずに自分の個性を主張すべきなのだ。もちろん、そのような個性を受け入れる姿勢を整えることも、私たちには必要である。「私が思い描く世界にジェンダーはない。あるのは性別のみだ。」「あなたが何を愛そうが何をしようが、その何かが人間としてふさわしいなら、それはあなたにふさわしいのだ。」このような筆者の考え方を世界中の人が理解できれば、社会は劇的に変わるだろう。性別を一脳のモザイクのように一誰一人として全く同じものを持つ人がいない個性として、そう捉えることが当たり前の社会を私たちはつくりあげるべきだ。

通巻第92号

2022年9月26日 発行

© 編集・発行 英教出版株式会社

代表者 小田 良次

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5

TEL. 03-3238-7777

<https://www.jikkyo.co.jp/>